巻　頭　言

野呂景義先生を憶う

門弟　白杉精一

野呂景義先生

我製鉄界の大恩人，日本鉄鋼協会の創立者，初代会長野呂景義先生　大正12年9月8日逝去せられてより茲に33回の忌を迎え，懐旧の情に堪えず拙文を捧ぐ．

先生は，旧名古屋藩の家老職先代伊三郎君の第2子として安政元年9月藩地に生れ，資生英邁向学心強く夙に英学に志し，16才の時（明治10年）既に藩の英学熟の助教授となつた．当時諸藩より優秀青年の東京開成学校（大学の前身）に遊学する者を募集した際加藤高明氏と共に選抜せられ，東海道を振分荷物にて上京し，野呂先生は工科に，加藤氏は法科に入学した．刻苦精励学業大いに進み先生は明治15年主席にて卒業と共に理学士の学位を受け，助教授を命ぜられたが，更に，18年5月採鉱冶金学研究のため自費にて欧洲留学の途につかれた．これと同時に旧藩主徳川義礼君も欧洲留学に上られたので，先生は介添として同行世話されし関係上帰朝後は加藤高明氏と共に徳川家最高相談役として参与せられた．また当時近衛篤麿公も英国留学中であつたが，先生は我国においては製鉄業の興隆は必ず達成せざるべからざる重大且つ緊急なる問題なるを力説され，近衛公も大いに共鳴され帰朝後は協力する旨を約せられた．先生は大いに力を得て鉄冶金を単に学問として研究するに止まらず，実地にも修業するの必要を感ぜられ，19年4月当時製鉄界の碩学独逸フライベルグ鉱山大学教授レーデブルグ博士に師事し，鉄冶金学の蘊奥を研め，21年7月同博士の斡旋により英独両国の著名なる工場並びに鉱山につき自ら職工となり苦心惨憺実務を練習しその要点を究め，22年4月帰朝再び大学に教鞭を執り，24年工学博士の学位を受け，29年に至る迄鋭意其職に従事し子弟の指導に尽された．

22年帰朝の後製鉄所建設の意見書を提出し，当時の総理大臣松方正義，農商務大臣榎本武揚両氏の援助により更に計画書を提出したが，財力に余裕なくして却下された．その間海軍大学に講師として鉄に関する講義をなし，また大学に鉄冶金の講座を開設し，或いは中間技術者を養成のため築地に工手学校（工学院大学の前身）の建設に努め講義をなし，また古川市兵衛氏にコークス製造場の設置を勧め自らその設計に当つた．また榎本子爵と共に全国の鉄資源を探究し，国会における説明の準備に努め，毎時の国会には常にこれが説明役を担当した．八幡製鉄所が愈設立と決定したる時図らずも鉄管事件に連座するの一大冤罪を蒙られ，予審免訴とはなつたが，公職一切を辞し野に下りたるは誠に千秋の痕事であつた．しかも先生はこれに屈せず37年欧米諸国における製鉄界の状況を視察，帰朝後は鋭意奮闘名声を挽回せられ，斯界の重鎮として世間の尊重を博せられた．これ先生の造詣深く豊富なる学識世に卓越する所ありたるによる．先生野に下りし後も官民製鉄業者の委托を受け斯業の発展に協力せられし事数うるに暇あらず．当時公私幾多の製鉄工場の建設を見たが，何れも技術上経営上陰に陽に先生の助言画策に俟たざるものなしと言うも過言ではない．即明治37年初夏八幡製鉄所における第1期の製鉄作業不結果に陥りたる際，先生は聘せられて顧問技師となり，救済作業よろしきを得て良成績を呈するに至つた．爾来身を終る迄同所の技術を指導開発せられた．斯の如く同所は勿論，育ての親として釜石，日本鋼管，仙人鉄山，北海道炭礦鉄道等の顧問となり，室蘭製鉄所，追分骸炭製造所の建設に当り，その他本渓湖，鞍山製鉄所，朝鮮三菱製鉄所の経営と言い事業の発展を期する外他意なく真に本邦製鉄史上に於て一世の瞻仰を担い，製鉄界の長老としてその令名を内外に轟かすに至つたことは偶然ではない．しも生涯を通じ晩年銃猟を試みたる位にて常に読書，来客の応接，事業の計画設計と後庭の菜園に花卉野菜の栽培を試かみるが如き他には道楽又は趣味なるもの一切なかつた．その他家庭に於ては公事は絶体に口外せられなかつた程謹厳であつたが，子弟に対しては親切温容溢るるが如く，これに接する者はその温情を決して忘れることができなかつた．

大正11年3月23日風邪に罹られ治療中肺炎に変じ1年半近く病褥にあられたが，一時小康を得らるるや絶えず

鉄鋼協会並に諸般の製鉄事業のため尽力せられ，殊に十五銀行頭取松方巌君の数次の懇請により同行の顧問となられたが，外出不可能に付不肖は先生の代理を命ぜられ砂鉄製錬作業を担当することとなり，松方頭取と会見同行重役一同と3，4回協議，製錬装置に関する一切の方針を決定承諾を得，尚慈作業開始の場合には先生は非常の御決意，高炉前に倒るる覚悟を示され，不肖の奮起を激励された．なお作業成績の満足なる正確を期するため，俵博士（当時東大鉄冶金教授）の非常なる御好意により同鉄冶金室を不肖に開放され，且当時助教授たりし田中先生（今の名誉教授工学博士田中清治君）の熱心なる援助協力による約4ヶ月間（5月より8月20日頃迄）の実験は試作見本約200個内外となりしと記憶する．そして漸く先生の御満足を得たる成績を示したると，高炉建設作業も略ぼ完成に近く火入も迫りたるにより，先生の御意見により一と先づ此実験を中止し，久慈に於ける高炉建設完了と火入れの準備を監督のため高炉所在地たる岩手県九戸郡久慈町に向つて出発した．この日（8月20日？）が永の御別れとなろうとは思い掛けなかつた．当日不肖は病床にあらせらるる先生に対し強く御治療を乞うたが，先生の言わるるには，自分は畳の上にて死するも，高炉前にて倒るるも死は同じ．武士が君の馬前にて死すると同じく自分の名誉と言うべきにより心配するな．いざと云う時には元気を出すぞよと言われ，病床（もつともこの時には横臥しては居られず床の上に坐つて居られた）より立上り廊下（廊下は巾6尺長さ7，8間ありたるように記憶す）に出られ，大手を振つて3，4回往復されいざと言う時にはこの通りの元気を持ち居れば安心せよとのお言葉であつたので，未だ2，3ヶ月は異状なきものと少しく安心しお別れしたる次第であつたが，大震災中朝鮮人襲撃の噂あり，居を後庭に移されたる折夜風に犯され，病勢進み日々その度を増し愈危篤に向われたるを知らず，あいにくの大震災に会し交通杜絶せるも危険を犯し帰京，（当時自宅は下谷根岸にあり先生は大崎におられた）．翌日危険を犯し先生を訪問せしも六里の距離もあり途中困難にて引返へすこと3回，9日に漸く目的を達せしも時已に遅れ，前夜不肖の来訪を待ちに待ち居られ，不肖来訪せば直に枕頭に通ぜよとの御命令により，御家族一同も一日千秋の思いで待ち居られしも遂に御冥目されたとて御遺族の遺憾限りなく，不肖も只忙然として怠慢拝顔を得ざりしを御詫致したる次第であつた．

茲に至り不肖の取るべき途は久慈砂鉄製煉場長たる地位を奪われたる以上は断然辞職の外なく，且先生の御不幸に会し永き間の御苦心も水の泡に帰したる訳なれば抗議を持出すも容れられざるべく，松方頭取に宛て，先生を失い不肖又引退せる暁にはこの国家的重要問題は必ず大失敗を来すべく，又貴行の永き間の御希望も崩れ取返へし付かざること甚だ残念なる旨を述べ断然辞職した．幾日かの後他の者代つて火入れ作業を開始せるに忽ち大失敗を来し，再び入をなし偽瞞的作業を以つて大々的にその成功を誇りしも忽ち曝露し全く面目を失い，遂に永久に砂鉄製錬作業は不火可能なる印象を官民間に与え，33年を経たる今日に至るも砂鉄製錬は一向に進まず優秀なる学術，経験を有せらる気鋭の技術家多数居らるるに係らず顧られざることは国家の為め真に惜むべき至りである．

是より先き先生が松方頭取の数次の懇請により顧問となられし際，松方氏は金一封を先生に贈られしに，先生は之を容れず言われるには，自分は今回の挙に付き松方家の為めに苦心するにあらず，国家的重要なる問題なればこの際是非共成功させなければならぬ考へにて引受たるものなれば御好意は謝するが受けるわけには行かぬとて，御令息に態々持たせ御返しになり，松方家にては鯨骨張の花籠を贈呈挨拶をされ現に同家に保存してある，又此挙に付き先生は成功を期し居られしも万全を計られ，正確なる好成績を握らるる目的の下に東大鉄冶金室に於いて実験に着手することとなり，俵教授の非常なる御好意と田中清治氏（当時助教授）の熱心なる御援助と御協力とによる約4ヶ月間に亘る実験は先生の御満足を得たる良成績を示したるを以つて，不肖は一と先づ実験を中止し高炉完成火入れ準備を急ぐ為め帰任する事となりたる次第であつた．しかも東大鉄冶金室に於ける実験の費用は先生のお手元より寄贈せられたるもの，即ち先生の国家に対する御誠意は誰人と雖とも仰慕せざるを得ない次第である．なお先生が砂鉄製錬研究につき不肖に対し与へられた数年に亘る御指導とその御熱意については機会あらば詳細を発表したきも，拙文且記憶を失い，又最も大切なる東大に於ける日々の実験に付き先生の御説明と御指導の作業方法等に関する御口述を記したる「ノート」2冊は久慈に帰任すると同時に清書を初めたが，（一部は先生へ一部は田中教授に呈する予定であつた）帰任匆々場長の地位を奪われたれば中止帰京し，昭和20年5月27日暁に於ける最後の大空襲の為め焼失，他に久慈に於いて5t高炉にて実験せる際の砂鉄，コークス，銑鉄，鉱滓並びに操作の報告等も焼失したるは惜しきことであつた．再記す先生の口述書を焼失し今は，25年間の御指導の厚恩を憶い幽かに記憶を辿り拙文を以つて聊か33回の忌に際し御霊を慰むるものである．（昭和30年7月）